

## 教職員研究会用レジュメ（保幼小連携について）2018年

小一プロブレムや学級崩壊が広がる中で、保幼小連携ということが言われるようになり、保育者や保護者たちだけでなく教職員の研究会や教育委員会主催の集まりで話をする機会が増えました。

小一プロブレムだけではなく、いじめや不登校、保育園における一歳児の嘔みつきの増加、家庭内における児童虐待やDVなど、以前とは様相が異なる子どもの成長や家族のあり方に関する現象、不可解な事件を考えると、見過ごしてはいけないことがあります。

民主主義や幼稚園・保育園、学校、福祉もそうですが、こうした歴史の浅い巨大な仕組みが、「親が親らしい」という前提のもとに作られた、ということ。それらは、「幼児たちが、育てる側のいい人間性を引き出し、その人たちの心をひとつにするという本来の役割を十分に果たせる」ことがあって成り立つのだ、ということです。

教育・保育・福祉の内容、そのやり方について後手後手にまわって試行錯誤してみても結局は本末転倒で、ますます混乱は激しくなる。いまのように仕組みが子育てを引き受ける、または引き受けざるを得ない方向で動いていけば、加速度的に学校教育を支えるべき土壌は崩れてゆく。

いま必要なのは、原点から耕し直すこと。その過程が、社会に一体感を再認識させる。もうそれくらいしか打つ手がない。

-----

「親心を育む」 松居 和

幼児が生まれてはじめて歩いたとき、それを見た人間は嬉しくなる。そして、一緒に見ていた人間たちの心がひとつになる。それが人間社会の原点です。その風景が、人間たちに生きる力を与えた。

幼児たちの存在が、社会に人間性を育てる鍵を握っている。

家族の絆が薄れ、家庭という形が崩れ、先進国社会で人々の心が荒れ始めています。日本という国で、いま保育者や教育者たちが、幼児たちと人間たちを出会わせる努力をしてくれれば、と思います。そうすれば、この国はまだだいじょうぶ。もし、このまま親たちの子育てに対する意識が変わり、子育ては誰かがしてくれるものという思いが広がり、家庭崩壊が進んでしまったら、義務教育が成り立たなくなってくる。

経済競争の中で人間たちが孤立し、社会の担い手たちをつなぐ「絆」が希薄になり、様々な格差が広がってくる。政府の言う「教育投資」など、夢のまた夢。「活躍する人材」などと言っているうちに、モラル・秩序が崩壊してゆく。

長い間、産むことは、即ち育てることでした。0歳児と、言葉の返ってこない会話を日々繰り返し、小さな人の気持ちを考え、想像する体験を積み重ねて、人間は自分が幸せになる方法を見つけてきました。

0歳児との不思議なコミュニケーションがすべての会話の最初にあって、それをほとんどの人間が体験することで、何千年もの間、人間は精神的健康を保ち、生きるために必要な絆を育んできたのです。

子はかすがい、ではなく「子育て」が人類のかすがいだった。

-----

毎年全国各地で120くらい講演をしているのですが、ここ数年、講演先で会う役場の保育

課の人たちが心配そうに言うのです。0、1歳児を毎日11時間保育園に預けることに躊躇しない親が増えている、と。

「子育て」が進化の条件だった人類にとって危ない「意識改革」が進んでいます。それに気づかなければ人間社会という仕組み自体が成り立たなくなってくる。

しかも、困ったことに、保育という仕組みにおいては、すでに人材も財源も不足し制度自体が限界に来ている。それが役場の人には非常事態としてわかるのです。

限界に気づき、少しずつでも親に子育てを返していかないと、学校教育や福祉を含め社会を支える仕組み全体が共倒れになっていきます。

「子育てしやすい環境づくり」が「保育施設を増やし、乳幼児を母親から引き離すこと」と、堂々と言うひとたちがいる。それでは、「子育て放棄しやすい環境づくり」でしょう、と心ある保育園の園長先生たちは思うのです。これでは、幼児の最善の利益を優先するという保育所保育指針という法律に反している。

なによりも、幼児たちの気持ち、幼児からの視線が欠けている。自ら主張できない幼児たちの、「親と居たい」という願いを想像しなくなったら、社会から人間性が失われてゆくのです。

日本はまだ奇跡的に良い状況にあります。アメリカで3割、フランスで5割、スウェーデンでは6割の子どもが未婚の母から生まれ、子育ての社会化が進み家族という形が失われ始めています。子育てが人々の人生の目的から外れてくると、社会全体のモラル・秩序が崩壊していく。犯罪率（たとえば傷害事件）を比べれば、アメリカは日本の2.5倍、フィンランドは1.8倍、フランスは6倍です。

日本がなぜこれほどまだ良いのか。子育てによって培われる「弱者に優しい心」が、まだ社会に残っているからです。父母という男女が協力し子どもを育てる姿勢が、欧米に比べ奇跡的に残っている。本当の意味での男女共同参画がまだこの国にはかろうじて残っている。だからこそ経済状況、犯罪の状況も、悪くなってきたとはいえ、ヨーロッパに比べ奇跡的にいいのです。

### マザー・テレサの言葉

この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、「自分は誰からも必要とされていない」と感じる事なのです。~マザー・テレサ~

「死にゆく者たちの家」を作り、そこで弱者のために活動し、人生の最後、誤魔化せない瞬間に立ち会い続けたマザー・テレサの言葉を読んで、あらためて思うのです。ほとんどの人間たちが人生の一時期、幼児を慈しみ育て、彼らが全身全霊で信じ、頼ってくれることに気づき、感謝すれば、自分の本当の価値観に気づく。「自分が本当に必要とされている瞬間」を幼児たちの眼差しから、数年間実感すれば、その記憶がその人の人生を支えてくれるはずです。

### 保育園・幼稚園における「一日保育者体験」について (学校教育が成り立つためにも親心を育てる。)

10年前、保育園の園長先生たちと「親心を育む会」という勉強会を始めました。保育園で預かれば預かるほど、親が親らしさを失い、それが子どもたちの不幸につながってゆく。それが目の前で見える。なんとか保育園で親を親らしくすることはできないだろうか。しかも一網打尽でなければ意味がない。

そこで提案されたのが「一日保育者体験」です。年に一日、保育園の場合は八時間、親が一人ずつ園児に囲まれ過ごす。普通の園では、まず半数の親が嫌がります。会社を休んで八時間。しかも一日ひとり、または一部屋にひとり。でも、半数の親たちが「何月何日私が来ます」、とスケジュール表に書き込んでくれる。つられて残りの3割が書き込みます。最後の2割は、もう他の親たちの保育者体験が始まっていますから、子どもたちが「お母さんは、いつ来るの、お父さん、来るの?」と聞いてくれます。

保育者は、「子どもたちが喜びますよ」と、繰り返し薦めます。園に対する信頼があれば、一年かければほぼ全員参加します。

お母さんがやったら、お父さんも、お父さんがやったら、お母さんも。夫婦別々の日に、卒園までに3回か4回、これで一家の人生が変わります。子育ては、育てる側が自分のいい人間性に気づく、一緒に育てる絆に感動する、それが原点でもあり、目標です。

埼玉県では、三年以内にすべての幼稚園保育園で、を目指すことになりました。当時の厚生労働副大臣に頼んで、新しい保育指針の解説DVDに「1日保育士体験」を入れてもらいました。保育参観ではなく「参加」を、これを進めることは、保育指針に書かれ、法律として決まった保育園の役割なのです。そのことは、堂々と親に言っているのです。法的裏付けもあるのです。でも、やはり親を説得する言葉は、「子どもがよろこびますよ」が一番良い。子どもが喜ぶ、それが社会をまとめる、進化を支えてきた「動機」です。それが目標になって初めて子どもたちの天命が果たされる。そして、子どもたちが天命を果たせないと、人間社会は一気に崩れてゆく。

#### ☆保護者アンケートより抜粋

- ・紙芝居を子どもに家で読んであげると、たくさんの子どもの前で読むのでは、今日のほうが緊張しました。一日保育参加にきてとてもよかったです。
- ・本人に生活習慣を学ばせるのは、すごく難しく、保育者の先生の手法がとても勉強になりました。お洋服のお着替えも、あのくらいできるんだと感動しました。それにしても先生はすごい! と、息子のときもそうでしたが、改めて感じ、感謝いたしました。
- ・とにかくエネルギーにあふれていて、パワーに圧倒されてしまいました。先生は本当に大変ですね。すごい!! と改めて感謝しました。保育参加できてとてもよかったです。読み聞かせは、もっと子どもたちの表情を見ながらやればよかったです。
- ・保育者の先生方の日々のご苦労を実感しました。わが子のしつけだけでも毎日疲労してしまうのに、多くの子どもに囲まれつつも、教育と安全と、調和を考慮しながらの保育の姿に頭が下がる思いと、紙芝居を読むことが、会社で上司や同僚の前で行うプレゼンより緊張するのだなと驚きました。
- ・最初は皆と仲良くできるか不安でしたが、子どもが好きなので皆に『○○くんのママ〜』って逆にかまってもらって嬉しかったです。
- ・平日は朝早くから夕方遅くまでお願いしており、忙しくしているので先生方の顔すらよく分からなかったのですが、今回の一日体験で園の中の様子や先生方もよく知ることができました。
- ・保育園での生活リズム・お友だちの顔・お散歩コース等々、いままで知らなかったことをたくさん知れて、いい勉強になりました。保育体験をするまでは不安でいっぱいでしたが、子どもたちが楽しく接してくれ、楽しい一日を過ごせました。でもやっぱり先生方の仕事は大変だなあと改めて思いました。感謝、感謝です……。参加してよかったです。ありがとうございました。

(一日保育者体験は、幼児に囲まれ、親が自分の中にあるよい人間性に気づく日、自分の持って生まれた本質、進化のための「遺伝子」を体験する一日です。そして、共に育ててくれている人たちに対する「感謝」。ここが一番重要なのかもしれません。親の「感謝」が保育者を育てる。学校教育を支える。これが消えていくと、いい保育者、いい教師から辞めてゆく。)

「一日保育者体験」は、保育者にとってもハードルです。いつでも親に見せられる保育をする、という意味表示。残念ながら、これに躊躇する保育園があって、日本の保育を困む仕組みがこのまま進み、保育がただの労働になってしまったら、そんな園が増えそうです。老人介護も含めて、福祉の怖い所は、それが「仕事」になってしまった時に、現場から真心を持った人たちが去ってゆくこと。だからこそ、子どもたちを守るために、いま「子育てを中心にした絆の復活」本当の意味での連携を進めなければならない。

（保育の質の低下は、保育者たちだけの責任ではありません。公立の保育士の6割が非正規雇用で、地方へ行けば時給950円。無資格の保育者を入れなければ13時間開所が成り立ちにくい状況を作っているのは政府です。しかも、新制度を作って11時間保育を「標準」と名付けた。

8時間勤務の保育士に11時間保育を標準と言って押し付けることは、保育士に「親身にならなくていい、ただ預かっていればいい」と宣言すること。保育士にとって1対20であっても、幼児にとっては1対1だということを国はわかっていない。

役場や社会福祉法人がハローワークに求人を出しても一人も応募してこない。子どもに悪い保育士を現場から除くことができない。すると、いい保育士がある日突然辞めてゆきます。この状況に、大学や専門学校における保育科の定員割れが拍車をかけている。保育士資格をとる人たちが、ほとんどふるいにかけられていない。

非正規雇用、無資格の保育者の質が必ず悪いわけではありませんが、政府や行政が保育（幼児の子育て）をこれ以上軽視し続けると、国全体の子育ての質が低下し、親も含めた子育ての連携が弱まり、学校の教師が精神的にもたなくなる。連鎖するように、学童や児童養護施設、障害者や老人を対象にした福祉にも限界にくる、ということです。

去年から今年にかけて、全国で、3歳未満児の入所希望が増え、待機児童を増やせない行政が、3歳以上児につけていた加配保育士をそちらに回しているのが現状です。いまの4、5歳児を1対30で保育するのはほぼ不可能です。加配保育士を削られれば、その無理が小一プロブレムに直結し、第一波が4月に学校に上がる。税金を使って未満児保育の受け皿を作れば、その数倍の税金を使って小学校の教師加配をせざるを得なくなる。教師の時給は保育士の3倍です。そして財源には限界があります。）

「一日保育者体験」で、子どもが嫌い、という親が変わり、父親の幼児虐待やDVが止まったりする。子どもたちの「お父さんが来た！」という素直な大喜びが、男たちの「生きる力」になる。

一回やったらもういいじゃないか、という父親がいます。しかし、3年続けると、我が子の成長だけでなく、他の子たちの成長が見えてきます。自分が園に行っただけで喜んでくれる。我が子だけではなく、他の子も喜んでくれる。ふと、父親の心に「自分は他の子どもたちにも責任があるのではないか」という気持ちが芽生える。部族の感覚です。先進国社会が失いつつあるコミュニティーの原点です。

お友だちのお父さんお母さんに毎年一度出会い、世話してもらったり遊んでもらうことによって、子どもたちの心に「みんなにお父さん、お母さんがいる」「困った時に助けてくれるのは、お友達のお父さんかもしれない、お母さんかもしれない」という意識が生まれる。これで小学校でのいじめが減ります。これが本当の意味での「保幼小連携」です。そして、子どもたちが、自分の親の他にも親身になってくれる人が存在することを小さいうちに肌で感じること。これもまた生きる力なのです。

頼ることができる人、信ずることができる人が世の中にはいる、と知ることでは安心します。頼ろうとしなければ、絆は生まれません。信じようとしなければ、信頼関係も生まれません。子どもたちが大人を信じ、大人たちがそれに応えようとする、人間の進化、幸福論の原点です。

(時々、保育士たちに頼みます。未満児を持つ父親に「眠っている我が子に、一人で子守唄をうたいなさい、良く育ちますから」と声をかけてください、と。子守唄は祈り。非論理的なコミュニケーションが、人類が抱える様々な問題の解決策になる日が来るはず。こういう時代です、学校教育はその三分の一くらいと一緒に歌うこと、踊ること、でいい。長い目で見れば、そのほうがよほど経済施策になっていると思うのです。)

「親心を育む会」で検索していただければ、ホームページがあります。品川区でも、7年前から全ての公立保育園幼稚園で始まっています。長野県の茅野市では、市長が「一日保育者体験」をマニフェストに入れて当選しました。板橋区でも去年から始まりました。板橋区のホームページには、各園ごとに保育士体験の写真、親の感想文、保育士の感想文が載っています。千葉県の市原市、石川県の小松市、横浜市、所沢市でも市長さんがやりましょう、と言ってくれました。福井県や高知県では県の教育委員会が主体になり、学校を立て直していくために県全体で始まりました。この方法で社会に感性を取り戻せば、自然治癒力、自浄作用が働くと思います。

保育者体験も少しずつ広がり香川県でも始まりました。県単位で取り組むのは埼玉県、福井県、高知県に続き4県目です。いつか一気に広まってくれることに期待しつつ、精一杯説明します。

幼稚園や学校での講演も増えました。幼稚園で講演すると、0、1、2歳児としっかり、ゆっくり時間を過ごし、乳幼児の不思議な役割を肌で感じ理解した親たちが多くいて、間違っていなかったんだ、と自分の決断に頷いてくれます。大学を出たりすると、そこで得た知識も使わずに「子育て」をしていることに「迷い」や「躊躇」を感じる人もいます。そういう人たちが笑顔になってくれるのです。

講演を聞いて、三日間くらい子どもが神様に見えました、という感想もあって、三日間でもそれが見えればいいのです、その感覚は何度も蘇ってくるはず、そこに人生の目的があります、と励まします。

幼稚園が一つもない市もあります。8割の子どもが公立幼稚園を卒園する市もあります。公立幼稚園は経費がかかります。全国的には絶滅危惧種と言ってもいいのに、その市での講演会には千人くらい公立幼稚園の保護者たちが来てくれて、一ヶ月後に熱い感想文を送ってきてくれました。公立幼稚園という形は親にあまりサービスをしないので、親がよく育つのです。絆も育つのです。

既存の園をほとんどこども園にしてしまった市がありました。小規模保育は作らないという市もあれば、増やそうとする市もありました。お金がかかっても保育の質は落とさないと頑張る市もあれば、財政削減の手段として公立園の民営化や保育士の非正規雇用化を積極的に進めている市もありました。それほど全国的に新制度の解釈が違います。市長さんたちの「保育」に対する理解度に大きな差がある。

現場を知らない政府の保育（経済）施策によって各地で混乱が進み、市長さんや保育課長さん、時には議員たちの意識の差で保育の地域格差がますます広がります。その定義さえバラバラになり、その結果、義務教育が混乱し追い込まれてゆくのです。

いまさら保幼小連携などと言っても遅い。小一プロブレムに対応するために「壁」を低くし仕組みの連携をスムーズにしようというのは、子育ての意味を知らない人が考える、その場限りの姑息な手段です。子どもの成長に「壁」は必要でしょう。転ぶからと言って道をなだらかにしては駄目なのです。

親子関係が安定していれば、「壁」が子どもを育て親を育てる。家族の絆は遊園地や行楽地で育つだけではない。「壁」や困難でより一層育つのです。「オロオロしない親は育たない親」と以前ある園長先生に言われたのを思い出します。そのオロオロを見て、子どもたちの中に何か大切なものが育ってゆく。そう信じればいいのです。

成績や経済競争における「結果」に子育ての目標を置くのはそもそも間違っているのですが、学校教育の伝統として存在した「小一の壁」を低くしていったら、高校や大学を卒業した時、もっと大きな壁にぶつかってひっくり返るかもしれない。その傾向はすでに現れています。その時の挫折は、人生において、小一の壁以上に取り返しのつかないものになるかもしれないのです。

保幼小連携を、まるでサービス産業のように「親に楽しさせるために」「子育てを簡単にするために」進めるのはもうやめるべきです。手をつないで壁を乗り越えていける「親子関係」を就学前に育てること、就学に備えることは親の責任だということをどう親に自覚させるかを考えるべきです。子育てにおける親へのサービスが、親子の信頼関係を崩していることにいい加減に気づいてほしい。

(絆を深め人間性を取り戻す保幼小連携)

### 「赤ん坊が人々の絆を育てる」

中学校で、家庭科の時間を使って赤ちゃんに触れあう体験を生徒にさせている学校があります。最近では、妊婦さんや乳児の定期検診サービスを保健所などでやっています。ボランティアを募って中学校に行ってもらいます。杉並区の場合、ボランティアにちょっとしたお礼が出ます。私が見学したのは母校の富士見ヶ丘中学校でした。妊婦さんが一人と、乳児を連れてお母さんが10人くらい。教室の前の方に並びます。赤ちゃんたちはあっちを見たり、お母さんを見たり、眠っている子もいます。一人ひとり、赤ちゃんを膝に置いてお産の時の体験談を語ります。大変だったけど感動しました。そう語るお母さんの顔には真実があります。未熟児で本当に心配したんです、危なかったんです。そう話すお母さんの真剣な顔に、母の強さと優しさを感じます。人間の弱ささえ感じます。それを中学生が見ています。

5人ずつグループになっている中学生の机のところに赤ん坊がやってきます。お母さんが「抱いてみて」と言います。一人の中学生が、恐る恐る、でも嬉しそうに赤ん坊を抱きます。その光景に私が嬉しくなります。お母さんは中学生を信頼して大事な赤ちゃんを手渡したのです。直感的に、次世代を信じている。信じてもらえた中学生が、誇らしげにクラスの友だちを見ます。いつか自分も次世代を信じる時が来るのです。

赤ん坊を抱くのが上手な男の子がいました。シャツがだらしなくズボンのそとへはみ出して、ちょっと不良っぽく見せています。その子には小さな妹がいて、いつも抱いていたのです。みんなが驚いて感心します。知らなかったことがわかったのです。彼は、家ではいいお兄ちゃんだったのです。昔の村だったらとっくに知っていたことなのに、いまの社会では、家庭科の授業がなければ知ることのできない、友だちの姿です。

僕も昔はこうだったんだな、と誰かが思います。お母さんたちも、中学生を見て、私も昔中学生だった、と思います。この時、魂の交流が時空を越えるのです。

人が別々に歩いてきた道が、乳児によって結ばれる。生後3ヶ月の赤ん坊が存在する限り、人の心が一つになる次元が存在しているのです。

### 中学生の保育士体験2

長野県茅野市で家庭科の授業で保育士体験に行く中学二年生に、幼児たちがあなたたちを育ててくれますよ、という授業をして、保育園に私も一緒について行きました。生徒たちは、図書館で選んだり自宅から持って来た絵本を一冊ずつ手にしています。昔、運動会の前日である坊主に祈ったように、絵本を選ぶ時から園児との出会いは始まっています。男子生徒女子生徒二人ずつ四人一組で4才児を二人ずつ受け持ちます。四対二、これが中々いい組み合わせです。幼児の倍の数世話する人がいる、つまり両親と子どものような関係です。もし中学生二人が一組だと、組み合わせや役割りに余裕がなくなるかもしれません。

四人いると一人が座って絵本の読み聞かせをし、二人が園児を一人ずつ膝に乗せ、もう一人の中学生は自分も耳を傾けたり、園児を眺めたりウロウロできます。園児に馴染んできたところで、牛乳パックと輪ゴムを利用してびよんびよんカエルをみんなで作って、最後に一緒に遊びます。

見ていて気づいたのですが、14歳の男子生徒は生き生きと子どもに還り、女子は生き生きと母の顔になる。お姉さんの顔になる。慈愛に満ちて新鮮に、キラキラ輝き始める。保育士にしたら最高の、幼児に好かれる人になる。

そして、考えました。

同級生四人なら、園児を守って旅が出来る。人類の法則を学んだ気がしました。

帰り際、園児たちが「行かないでー！」と声を上げます。泣きそうな子も居ます。ほんの一時の触れ合いで、世話してくれる人四人に幼児二人の本来の倍数の中で、普段は保育士一人対三十人で過ごしている園児たちが、離れたくない、と一生懸命叫ぶのです。私はそこに日本中で叫んでいる幼児たちの声を聴いたような気がしました。

中学生が幾人か涙ぐんで中々立ち去れない。それを同級生が囲んでいます。保育士さんと先生たちが感動しながら見えています。

### 「小学生、高校生の保育者体験」

高校生、中学生、小学生に夏休みを利用して三日間の保育者体験をさせている園長先生が島根県におられます。もう二十年も前からやっています。

「1日や2日じゃだめです。3日がいいんです」と、先生は私に保育者体験をした子どもたちの文集を見せてくれました。文集に載っている子どもたちの率直な感想の中に、園の持つ不思議さ、園の人間社会に果たしうる潜在能力が書かれていました。

小学五年生の男の子が、こんなことを書いていました。

「僕は、保育園に行きました。どうしていいかわかりませんでした。黙って立っていたら、小さな男の子がきて、『あそぶか?』って言うてくれました。僕はとてもうれしかった」と言うのです。

ついこの間まで「園」にいた子どもが、「学校」に入って5年で、幼児の集団を前に、どうしていいかわからなくなってしまう。これはどういうことでしょうか。知識や言葉に縛られはじめているのでしょうか。

「あそぶか?」と言うてくれた幼児は、良い子ぶって、そう言ったのではなく、かわいそうに思ったからでもありません。ただ無心に、「あそぶか?」と言ったのです。そこに駆け引きがない、ウラオモテや私利私欲がない。それを感じたからこそ、男の子はうれしかったのです。無心から出た幼児の言葉に、言葉に縛られていた魂が解放される。真理に触れる瞬間です。

計算のない人間関係に私達は魅かれます。それに憧れるから、保育園の園庭は大人にとっていつも眩しい場所なのです。

別の男の子の体験です。やはり五年生です。二日目。「シャボン玉を吹いてあそんであげました。僕はちっとも面白くなかった。でも小さい子たちがよろこんでくれたのでうれしかったです」と書いてあります。

難しく言えば、他人の幸せを自分の幸せと感ずること、そこに幸せがあることを体験した。自分自身の人間性を発見した、と言ってもいい。一番大切な、人類の進化にかかわる幸せの見つけ方を知ったわけです。「親」になる時に一番役に立つ種類の幸せのものさしです。週に1回教会やお寺に通っても、こうした特上の幸福観の物差しは、そう簡単に見つからない。それを園に行つて幼児と遊ぶだけで発見する。文部省は「心の教育」などということを言いますが、自ら発見する場を与えてやるのが大切です。

三日目、別の男の子がこんなことを書いています。（小学生は男の子の方に新鮮な、素朴な

感想が多く、高校生になると女の子が幸せになる感受性を発揮するようです。)

三日目になると小学生も幼児達もお互いに慣れてくる。

「だっこして、おんぶして、と言われて本当に疲れた。でも、僕も昔はこうだったんだなあ、と思った」と書いています。

幼児を見て、何人の大人が、「自分も昔はこうだったんだな」と思えるか。これは、実はとても大切なことです。子どもは純粹だ、と言う人がいます。そういう視点で、「自分も昔は・・・」と思う大人もいるでしょう。子どもは自由だ、という人もいます。子どもは大人がいなければ生きていけない、という運命を感じることもあるでしょう。色々な意味で、様々な思いで、「自分も昔はこうだったんだな」という言葉は今の自分に生きてきます。

自分の子どもを家で見ていてもなかなかこういうことは心に浮かびません。ところが自分の子どもが集団の中で遊んでいるのを1時間も見ていると、ふとこんなことを考えるから不思議です。人がものを考える時、「風景」というものが大切なのではないか、と思います。

親が月に一度でも、私も昔はこうだったんだなと思って子育てしていれば、子育てはまず大丈夫です。この国も大丈夫です。単に相手の気持ちを押し量るだけではなく、過去の「自分を通して」相手の気持ちを見る、ということが大切です。「子育て」は本質的には親が自分を見つめる作業です。子どもとの人間関係の中から、自分について、人生について深く考えるチャンスを与えられることなのです。それを小学生五年生がこうして作文に書く。理屈抜きに、フツとそれを言うのです。

誰もが昔、「だっこして、おんぶして」と言った経験がある。これはとても大切な経験です。つまり、一人で生きられなかった体験を皆が持っている。

親達に、「自分も昔は・・・」と感じさせ、気づかせることができれば、「園」はその役割をすでに果たした。親達は道を見つけて、それぞれのやり方で進んで行くでしょう。どんな親になるかは親達の選択であって、選択すること自体が、親らしくなっていくプロセスです。基本的なことに親達が気づけば、あとは運命です。自然にまかせるしかないのです。

そして、忘れてはいけないのは、「いい親になりたい」「いい親でいたい」と思った瞬間にその親は「いい親」だということ。いい親は、結果ではなく「心持ち」の問題だとということ。

親から子への、職業の世襲や生活技術の伝達がなくなって、親達が具体的な子育ての目標を持ち合わせていないという現代社会の欠陥を理解し、親が子育てから逃れようとするのを「園」を利用してうまく引き留めることができれば、人間の遺伝子の中には、大部分の親達が、まあまあ親に育ってゆく道筋がついているのだと思います。

小学生、中学生、高校生の家庭科の時間は、保育園、幼稚園という不思議な場所を利用して、子ども達を親らしい人にするのを第一に考えて授業をすべきだと思います。大自然の法則に従って、幼児の集団は人間を育てる、ということをお頭においてやったらいいと思います。

(親側に「自由に生きたい」という概念が身につくと、時として子ども達の「自由さ」が腹立たしく、虐待の原因になってゆくことがあります。自分もそうだった、ということをお思い出すためにも、「園」という場所が生きてくる。自分も自由だったということをお思い出すことによって、自由とは心の持ちようなのだ、ということに気づく。)

園児に混じることによって、小学生の不登校やいじめが止まります。信じてもらえる体験が、子どもたちに生きる力を与えます。

ふだんはコンビニの前でしゃがんでタバコを吸っている茶髪の高校生が、園に来ると園児に人気が出る、という。不良高校生が保育園に来ると生き返るといふ。もともと、心が園児に近いのかもしれない。だからこそ一人でしゃがんでいたのかもしれない。

園児は駆け引きをしません。駆け引きをしない人たちに人気が出るということは、本物の人気。高校生もそれを知っています。自分のままでいい、生きているだけで喜ばれる、という実感が「生きる力」になる。幼児を世話し、遊んでやって、遊んでもらって、弱いものに頼られる幸せが新鮮に思えてくる。

以前、「悪い？」高校生がズボンを腰の下まで下げて悪ぶっていたころ、保育者体験に行っ



て三歳児に、ズボンはこうやってはくんだよ、と注意されて慌ててズボンを上げたという話を聞きました。校長や教頭が三年注意して上がらなかったズボンが、三歳児に注意されると三秒で上がる。そこに宇宙の法則が動いている。「悪い？」高校生でさえ、こういう人たちがいるから自分はいい人になれると知っている。こういう人たちがいるから自分はすでにいい人なんだと、遺伝子のレベルで知っている。

幼児とのやりとりは、人間たちに、自分の本質は「善」である、ということのを思い出させてくれます。本来の自分の姿に嬉しくなる。

家庭科の時間を使って、高校生が男女二人ずつ幼稚園でクラスに入っているところを見ました。高校生たちが、幼児に混ざって一緒に遊ぶことで「いい人間」になっている自分に気づきます。女子生徒と男子生徒が、幼児のいる風景の中で、お互いを、チラチラと、盗み見しています。男子生徒と女子生徒が、お互いに根っここのところではいい人間なんだ、ということに幼児を媒介にして気づくのです。

宇宙は、私たち人間に自信を持って0才児を与えている。人間すべてに幼児によって（または弱者によって、時にはペットや草花によって）ひき出されるいい人間性がある、と宇宙は信じている。私たちも、もう一度それを信じなければならぬ時期に来ています。

幼児と過ごすこと、そして子育てによって男女間、社会の最小単位であれ夫婦間に生まれる信頼関係、いい人間性の確認、本当の少子化対策は、こういうところから始まるのだと思います。頼る幸せ、頼られる幸せ、両方を知っていなければ社会の絆は育ちません。

（この国の少子化の一番の原因は、現在2割、十年後3割の男が一生に一度も結婚しないこと。経済競争に巻き込まれているうちに、男女間の信頼関係が薄れてしまった。子はかすがい、ではなく、「子育て」がかすがいだった。「子育て」で育まれる生きる力、充実感を取り戻さないと少子化に歯止めはかかりません。）

### 校長先生の一日保育士体験

ある園長先生の園の卒園児が、いまはもう中学三年生なのですが、学校でとんでもない「ワル」になったというのです。行っている中学の校長先生が園長先生の友人で、お前のところの卒園児だが、本当に困り者だ、と話したのです。

一度見に行ってみよう、園長先生は、中学校に出かけて行きました。

そして、私に言うのです。

「見に行ったら、ちゃんとあの子がそこに居ました」

園長先生が見たのは幼稚園時代と同じ、あの子でした。幼稚園時代を知っている園長には、中学生になってワルと呼ばれても、その子の本質が見えました。

中学生は、幼稚園時代、自分が神様仏様だったころのしっぽをぶらさげています。園長先生の目はごまかせません。

その子の幼児期が見える、これが「親であること」です。保育園・幼稚園・学校と仕組みも変われば担任も変わるシステムに親の肩代わりは出来ない。保幼小連携、と言いますが、それによって子育てをより一層「引き受けること」なってはいけない。「連携して」できること、できないことの区別は常に意識していないといけない。何よりも、子育ては育てる側がどう育つか、どう心をつなげるか、が第一義だということを忘れてはいけない。

子どもが50歳になっても、親が子どもを叱っている時、親たちは幼児期の子どもを見ることがあります。それが、「親身」ということかもしれません。こういう時代だから、校長先生たちも親身になることを求められている。

子育て支援と言いますが、保育園が要求されているのは、子育て「代行」です。教育と言いますが、教師たちが求められているのも、かなりの部分子育て代行になってきています。これをすると、ますます社会に親らしき人間性がなくなっていくのですが、ここまで来てしまっただけで相対性理論かエネルギー保存の法則かわかりませんが、誰かが補填していかないと先進国社会は成り立ちません。いまの政府の施策のように積極的に推進されたらたまりませんが、望むと望まざるとにかかわらず「代行」するしかない。そして、お互いに育て育てられる関係だと

いうことにいつか気づくように、少しずつ意識的に、親に子育てを返してゆく。

校長先生たちにお願ひしました。中学生の中に「その子の幼児期」を見て下さい。それに向かって話しかければいいのです。それが見えないなら、見えるようになるために保育園や幼稚園に行って幼児に囲まれて下さい。年に三日もいくとずいぶんちがいます。園で見た子たちが中学生になる頃には、校長先生は引退しているかもしれません。それでもいい。これは人間の感性の問題なのです。

講演が終わって懇親会の席で、校長先生たちが私の席に来て笑顔で言うのです。

「松居先生の話、孫が居るので良くわかります」そう言って携帯電話の中に入れてあるお孫さんたちの写真を順番に見せてくれるのです。

「これがご本尊様ですね」と、私も笑いました。

### 祖父母の一日保育士体験

子どもたちは、見守られるために存在します。茅野市の保育士たちが「祖父母の一日保育士体験をはじめましょう」と言いました。親がまだ半分しか参加しないのならば、祖父母でもいいのです。誰かに見守られている、という意識が子どもたちに身につけば、きっと小学校でのいじめも減るでしょう。祖父母も喜ぶでしょう。「祖父母は年に一日でなくて、週に一日でもいい。暇なんだから」と一人の保育士が言いました。在園児の祖父母でなくても全然かまわないのです。子どもには、誰かのおばあちゃん、おじいちゃんがいいのです。

子どもを使って、人間たちが喜ぶことをする、それが園や、学校の役割なのです。

---

### 「関わること」

「親心をはぐくむ会」で、保育とは、子どもに関わること、という話になった時、関わるとはどういう意味か、なでしこ保育園の門倉先生が説明しようとして、なかなかうまくできず、「とにかく子どもと関わること。関わることなんだよ」（門倉先生は女性です）と歯がゆそうに繰り返したのです。

すると、朝霞の大島園長先生が言いました。

「1歳児、2歳児で噛みつく子がいます。そういう時、私は、保育士を一人決めて、あなたは今日一日この子に関わりなさい、と言います。朝から夜まで10時間、その子につきっきりにさせるのです。他の子のことは考えなくていい、その子だけに集中させるのです。子どもが嫌がっても、させます。それを一週間、時には二週間、一人の保育士が張り付くのです。すると、その子が噛みつかなくなるのです」

「そうなんだよ。それが関わりなんだ！」びっくりするほど大きな声で言った門倉先生の目が燃えています。

「四歳、五歳じゃ、遅いんだ。一歳、二歳でそれをやんなきゃもうだめなんだよ。昔はこんなことはなかったんだ」

1歳児は、保育士一人で4人の子どもを見ます。一人が「関わったら」負担がまわりに確実に及びます。それでも、その時、その時期に関わらないと、その子が不幸になる。小一プロブレムや学級崩壊の原因になるかもしれない。その時の「関わり」がその子の一生、そしてその周りのひとたちの人生に影響を及ぼす。その子の幸せを遠くまで、直感的に見透す門倉先生と大島先生は、だから保育士に「関わらせる」。

保育界に、もう少し余裕があったら、と思います。こうした日本の将来を見透す同志たちが、まだ生きていうちに、社会が保育の役割りに気づいてくれたら、と思います。もっと進めて、保育者が「関わり」の欠如を補わなくてもいいような仕組み、家庭で親たち、祖父母たちが本来の役割を果たしてくれることを前提に、関わりの「連携」で一緒に子育てできたら、と思います。

私は、インドの不可植民の少女たちを集めて女性の意識改革を「踊ること」で進めている修道女のドキュメンタリーを作りました。「シスター・チャンドラとシャクティの踊り手たち」と言います。

(ホームページから映像を見ることが出来ます。<http://kazumatsui.com/>)

このドキュメンタリーの中ほどに、普段は小学校にも満足に行かせてもらえない村の女の子たちが、サマーキャンプが開催されるシャクティセンターに向かって行進するシーンがあります。胸を張って歩く子どもたちの勇姿、はじけるような笑顔、そして、その子たちを教えるシャクティの少女たちの真剣な顔を見ていると、その子たちが、しっかり「関わって」もらった子たちであることがわかります。こんな子たちに「教えること」は、それ自体がすでに「関わること」。信じあう、幸せなのです。

教えることが、教える側の幸せになっている。だから、教えられる側がいつか「幸せな教える人」に育ってゆく。そんな当たり前の風景が、シャクティの世界にあって、私に考える基準を教えてください。先進国社会でどんどん希薄になってゆく幼児との関わりが、いかに自然で大切なものだったか、シャクティの風景を思い出すと、より一層はつきりしてきます。

週末48時間親に子どもを預けるのが心配だ、と保育士が言う時代です。せっかく五日間良い保育をしても、月曜日にまた嘔みつくようになって戻ってくる、せっかくお尻がきれいになったのに、月曜日、また真っ赤になって戻ってくる、48時間オムツを一度も替えないような親をつくりだしているのは、自分たちなのではないか、そんなジレンマのなかで保育士たちは20年間やってきました。保育は、度々雇用・労働施策に入れられ、企業の下請けのように扱われ、経済論に振り回され、親たちが親らしくなる機会を心ならずも奪ってきました。大人たちの都合で子どもたちが安心して過ごす環境が犠牲になってきました。すでに児童養護施設は一杯で、地域によっては、保育所が仮児童養護施設のような役割を果たさなければならなくなっています。家族の絆が薄れ、老人介護も予算的に危ない所まで来ている。こんなことを続けていたら、まず、学校がもたない。福祉全体が間もなく限界にきてしまうでしょう。

埼玉のある町でのことです。中学校がひとつ小学校が二つ、保育園が三つある町です。この三つの保育園が以前から結束し、意識的に、親を育てる行事をたくさん保育に取り入れてきました。すると、小学校が落ち着く。親たちがとても協力的で中学校でも問題がほとんど起きないのです。教員の異動があると、あの町で教えたい、と希望が出るのです、と教育長さんが自慢げに話してくれました。ひとつの中学校区という単位で、学校と保育園が結束して親心を育てれば、親心のエコシステム、ビオトープのようなものが作れるのです。自然治癒力・自浄作用が働くのです。

人生の質は、自分が育てている子どもが四歳になるくらいまでに、どれほどその子に信じてもらったか、愛されたか、そのことに気づくか気づかないかで定まってくるように思うのです。

親が子に、自然の摂理としてほぼ無条件に愛されたことを意識し、それをどう心に刻むかで人生の物差しは決まってゆく。親が子どもとの関係の確かさに感謝し、心に刻むことで子どもたちも、誰かを「信じること」が生きる力なのだ、と、遺伝子のレベルで気づく。子どもたちが人を信じて生きていけば、親もまた嬉しい。

生きる力は、技術でも、能力でも、競争に勝つ力でも、自立しようとするでもなく、「信じること」の連鎖の中に身を置くこと。それが自己実現と呼ばれるものだったはずです。そこを忘れると、人類全体の生きる力が弱くなってくる。(その源となる、一家の生きる力が弱くなってくる。) その中で必死にもがいているのが今の人類かもしれません。

幼児に選択肢無しに信じてもらう事で、人間は「神に愛されている」「仏の慈悲に包まれている」、そんな感触を持ったのではないのでしょうか。それはすべての人間が多かれ少なかれ体

験する感触で、それに気づきましょう、と勧める手段が「宗教」かもしれない。続いて来た歯車が永遠にまわり続けることを願って…。

人間は、幼児にあこがれて生きてゆくのがいい。

学校教育が普及し、技術や仕組みの進歩に惑わされると、急速な進歩が、何万年もの間育まれてきた人間の本来の感性を退化させていることに気づかなくなります。

子どもを産み、育てるということは、人間が宇宙から与えられた尊い仕事。自分自身を体験することでした。自らの価値を知ることで、人間は納得する。

もっと尊い仕事は、子どもが親たちを育てること。それは宇宙の動きそのもの。一人では生きられないことを宣言し、利他の道を示すこと。

親が子どもを育てることは、人間の本能と意思がそれをさせている。

幼児が親を育てる風景は、宇宙の意思、姿がそこに現れる。

### 中学生に講演して

全校生徒に話す時は大変です。1年生と3年生、男子と女子ではずいぶんちがう感じがするのです。それでも一生懸命、大人に話す内容とほぼ同じことを話します。時々、そっぽ向かれそうになると仕方ないからオロオロします。すると、そんな私を助けてくれようとしています。

中学生は私の講演をけっこうしっかり理解してくれます。感想文を読むとわかります。まだ神様のしっぽを引きずっている人たちが、感性で、本質的な部分を理解してくれると、とりあえず試験に通った気がして、私も嬉しい。

中学生に講演する時は、一週間前から緊張します。

ごまかしは効かない。でも、あっちもまだごまかして生きてないから真剣勝負みたいなどころがある。講演前の緊張の一週間で、彼らが、すでに私を育てようとしているのを感じます。ですから、こんな人たちと毎日つきあう中学校の先生を私は、うらやましくもあり、大変なことだ、と尊敬します。

### 中学生に講演した時の感想文から

「よくわからなかったけど、聞いてよかった」

「いつでも、無言の愛というやつはとてもいいと思っております」

「話が難しく思いましたが、生きていくうえでは大切なことだと思いました」

「自分も小さい子たちにはげまされて、育てられたいです」

「自分が親になって困ることより『いいな』と思う方が多くなる日が来ると思うと、とても楽しみになりました」

「幸せについて、きちんと語る人はめずらしいです。ぜひ、次の講演も頑張ってください」

「親になりたいと思いました。今日のお話しは、私の成長につながったと思います」

「私たちは親に育てられているだけではなく、私たちが親を育てているとゆう話を聞いて、なんていえばいいかわかりませんが、話にひきつけられました」

「松居さんが一年生からの質問の答えを、全て精神的なことで答えていたので、子どもを泣き止ますためには、まず自分が落ち着いて、それから自分でどうすればいいか考えるのが大事なんだなあ、と思いました」

「非常に実になるお話を聞くことができ、とても嬉しいです。『幸せのものさし』という言葉をよく使われていましたが、あれは自分の価値観ということなんですか。自分も職場体験で幼稚園に行き、園児たちが自分の行動一つ一つに笑顔を見せてくれて、松居さんの『幸せのものさし』というものがよくわかった気がしました。子を育てるという行為が、逆に自分を

育てることにつながるという話が一番お話の中で共感でき、印象に残りました。松居さんの色々な経験談を聞いて、本当に自分の物事を見る目が変わりました。とても良かったです」

「私は、幼い子は苦手なので、今まで幼い子と関わらないようにしてきました。けれど、今日の話聞いて、積極的に幼い子と関わろうと思いました。」

「幸せは人によって違うけれども、幸せを見失った時、幼い子どもの幸せを眺めているだけで、幸せを得られる。その幸せこそが最高級の幸せであり、その幸せを感じられることもまた幸せである。

今、まさに幸せの形を追い求め始めていたので、とても参考になりました。今日のお話しで、今の自分に少し自信が持てました。少し、がんばってみようと思いました。」

「僕は、今回の話を聞いて、幸せとはどういう物かっていう、自分のものの見方が変わりました。幸せは、人生の中で、どれだけ成功できるかとか、作り出していくものではなくて、その今生きている人生に幸せを生み出す＝ものの見方を変えていくことでつかみとるものなんだなと思いました。その、ものの見方は幼稚園、保育園児に学ぶものであったり、他にもいろいろな人から学ぶこと、いろいろな物から学ぶことであると思うので、しっかりと自分とかを見つめ直して、初心を忘れないようにできたらな、と思いました。」

「自分の考えを変えれば、なにかが変わるんじゃないかな、と改めてわかりました。」

「僕ははじめは、話をきいて、とても難しいはなしでよく分かりませんでした。でも、せっかく講演会を開いていただき、意味も分からないままでは、もったいないと思って、一生懸命話をきいていたら、だんだん松居さんのはなしの意味がわかるようになっていきました。マサイ族が一人で立っている草原をイメージして集中していると、30秒でピタッと泣きやんだ、なんてはなしは、普通にきいていたらきっと信じませんが、松居さんが話しているのをきくと、すごく気持ちがこもっている話で『本当なんだろうな』』と思うことができました。

今日の講演会では、松居さんの気持ちのすごくこもったいい話をききました。家に帰ったら親におしえてあげたいです。自分が大人になって子どもを持つようになったら、この話を思いだして、子どもといっしょに”立派な人間”になっていきたいです。今日の講演会はとても自分のためになったと本当に思います。

小さな子どもと遊ぶときなどに、今日の話をおしえて、やさしく対応してあげたいです。」

「今日、松居先生の話聞いて心にのこったことは、園長先生がうさぎになってくださいと言ったとたん、お父さんたちがうさぎになったことです。園長先生は、お父さんたちをうさぎに変えることができすぎてすごいいし、お父さんたちは子どものために、はずかしがらずにうさぎになるのもすごいいと思いました。ぼくは、この話を聞いて、弟がほしくなりました。」

「私は、『親になる幸せ』を聞いて、不思議な気持ちになり、同時に、早く大人になって子どもを産んでみたくなりました。私が今生きている。それだけで周りの人たちが笑ってくれる。それだけで幸せだと思いました。」

「ぼくの妹はダウン症候群で、上手く話せません。いろいろ困ることがありますが、ぼくは妹がいてとてもよかったと思いました。」

「ぼくは、親に幸せをあたえていると聞いて、安心しました。僕もはやく親になって、子どもから幸せを受けてみたいです。」

### 「逝きし世の面影」（日本の伝統）

最近ベストセラーになっている「逝きし世の面影」渡辺京二著（平凡社）という本があります。その第十章に「子どもの樂園」という章があって、150年前に日本を訪れた欧米人が、様々な文献に書き残した日本の本当の姿が見えてきます。その章だけでも読んでもらいたいです。子どもたちの美しさと日本の子育ての不思議さに驚き、欧米人がこの国をパラダイス、と呼ぶ。「子育て」中心に生き、損得勘定を捨てている大人たちが、大らかにのびのびと幼児を眺めて暮らしていた国だった。それを、欧米人が時間を超えて伝えてくるのです。

江戸という街では赤ん坊の泣き声が聴こえない、と書いてあります。

世界中で江戸ほど玩具屋の多い街はない。たかが玩具にこの国のひとたちはなぜこれほどにこるのだろう、と欧米人が目を見張ります。

江戸で朝、男たちが12人ほど並んで座っている。全員が幼い子どもを抱え、我が子の自慢話をしている。そんな男たちの絵まで残っています。男たちと幼児たちがこれほど一体の国はない。インドや中国を見た欧米人が、その風景に驚くのです。

日本の子どもは5歳くらいまで誰かの背中で育つ。降りると、すぐに赤ん坊をおんぶする。

そして、日本人は幼児をしからない。ほとんど崇拜している。幼児は家庭の中で暴君のように崇められる。それなのに、なぜ6、7歳になると従順で優しい子に育つのだろう。日本の子育ては魔法だ、と書いてあるのです。

子どもを眺め、拝むことで自分たちの人間性が整うことを知っていた。人生は自分自身を体験すること。だから、自分のいい人間性をひきだしてくれる子どもたちを中心にして生きていた。

「子育て」で心がまとまっていた国だった。

それをもう一度取り戻さないと、この国が、この国である意味がなくなる。

---

「衆議院、税と社会保障一体化特別委員会での発言」

<http://www.youtube.com/watch?v=uiTxamfg6iM>

## いじめについて

現在、いじめに会っている子どもたちの悲しさは、親子の絆が強く信頼関係が存在する状況での戦争や貧困の体験よりも、深く苦しいかもしれない、と思うことがあります。

子どもたちは、つねに信頼と安心を感じようとして生きています。この子たちが30年、40年この国を支えてゆくこと考えると、いじめの問題はこの国の教育にとって一番重要な問題と言ってもいいでしょう。

幼稚園や保育園で、父親たちが月に一回酒盛りをしている。そんな園があります。子どもたちが、「お父さん同士が友だちかもしれない」と思う。インドの村なら当たり前。「その意識があれば、小学校でのいじめはなくなるんです」と言った園長先生がいました。

毎朝、小学生がクラスごとに輪になって踊り、親たちが順番に3人ずつ加わる、そんな方法もいいはずです。祖父母対象の敬老給食を発展させて、みんなにおじいちゃんおばあちゃんが居ることを、子どもたちに繰り返し意識させることもいいでしょう。幼児や子どもたちの役割り、働き、存在意義をもう一度社会という仕組みが思い出せば、できることはたくさんあります。

いじめをあつてはならない、と見ては意味がない。子どもがこういう良くない行動をする時は、取り囲む環境、だいたい大人の世界（人間関係）に問題があつて、警告を発しているのだと考えるべきです。子どもはいつも誰かを育てようとしている。そして、自ら育つことでそのひとたちの心をつつとしようとしている。

いじめは社会の一部であると同時に、ひとり一人の人間の一部で、人間の命は社会全体としても命、と考えなければなりません。社会全体に欠けてきていることが何かを考えれば、そこに解決策がある。

「大人たちが、誰かの責任にしようとしている。大人同士が絆を作ろうとしていない。親と教師が信頼関係を作ろうとしていない」これが、いじめという子どもたちからの警告の中身なのでしょう。

子どもたちの未来の幸せを願って父親たちが意識的に知り合いになる。小学校で、「本気で」輪になって踊る。そんなところからはじめることができれば、この国はまだ大丈夫かもしれません。それは簡単にできることなのに、しようとしなくなった。いじめや不登校の土台に

「子どものために決意しなくなった」親たちがいる。

親たちがまだ初心者の中に、昔は当たり前だった体験を、自分の人生のために「親たち」が繰り返し、それを子どもたちに見せてあげると、いいのです。

板橋区の一泊保育士体験（写真や感想文がたくさんあります。）

[http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c\\_categories/index04004012.html](http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_categories/index04004012.html)

一日保育参加／埼玉県の取り組み

<http://www.pref.saitama.lg.jp/page/24moderu.html>

「保護者の保育参加事例集」

<http://www.pref.saitama.lg.jp/page/oyashien.html>

高知県教育委員会の取り組み

<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311601/hogosyanoitiniti.html>

茅野市の取り組み <http://www.city.chino.lg.jp/ctg/03091001/03091001.html>

保育士の感想（茅野市）

[http://www.city.chino.lg.jp/ctg/Files/1/03091001/attach/hk\\_taiken\\_9.pdf](http://www.city.chino.lg.jp/ctg/Files/1/03091001/attach/hk_taiken_9.pdf)

品川区の取り組み：

<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/menu000011100/hpg000011037.htm>

福井県教育委員会で始まっている一日保育体験。参加者の 63.8%が「大変良かった」、「良かった」も合わせると 97.3%という数字。感想文も沢山あります。幼保と家庭の信頼関係が、一緒に育てるという絆につながり学校を支えていくはず。どんな形でもいい、大人たちが幼児たちに囲まれる。それを繰り返してゆけば自浄作用が働く。十歳以上の人間と一緒に子どもを眺め、自分たちが失った物差しを確認しあえば、世代を超えた体験が重なり自然治癒力が働く。待機児童を無くすのではなく、待機児童という言葉が消えてゆくのだと思う。

[http://www.pref.fukui.jp/doc/gimu/youjikyouseiku/youjikyouseikukatei\\_d/fil/023.pdf...](http://www.pref.fukui.jp/doc/gimu/youjikyouseiku/youjikyouseikukatei_d/fil/023.pdf...)

あしがき （参考資料）

視覚障害の子を引き受けた理事長先生から聴いた悲しいけれどなぜか美しい話です。保育の難しさ、子育てを共有しながら、部族社会（運命共同体）にはなり得ない、三年間だけの宿命を象徴する話です。

私立の幼稚園の理事長先生の体験談。男性ですが、子どもが大好きで熱血漢、県会議員もやっておられる年輩の方です。

ある年、視覚障害をもっている子どもを引き受けたそうです。経験がなかったので躊躇したのですが、どうしても、と言われ、決心し、自ら勉強会や講習会に通い、出来る限りの準備をしたのだそうです。

その子が入園して間もなくのころ、砂場でその子が一人で遊んでいて、自分の頭に砂をかけたそうです。その「感じ」がよかったのか、そっと、繰り返しかけたのだそうです。理事長先生は、注意することなしに「遊び」「体験」として見ていました。幾人かの子どもが集まってきた、その子にそっと砂をかけ始めました。それを理事長先生は、「育ちあい」として見ていました。長年保育をしてきた先生の経験からくる確かな判断がありました。その子のお母さんが見ていたことも、先生は知っていました。

無事に3年が過ぎ、卒園が近づいてきました。そして、その子の母親が「あの日」のことを卒園の文集に書いたのです。砂をかけられ幼稚園でいじめられている我が子の姿がどれほど不憫だったか。それを先生たちは笑って見ていた、と。

理事長先生は、あれほどびっくりしたことはなかった、悲しかったことはなかった、障がい

児を預かるのはもうやめようかと思った、と話します。子どもに対する思い、保育にかける情熱に自信がありましたから、その気持ちが母親に伝わっていなかったことにびっくりしたのです。

3年間そういう思いで過ごしてきた母親の気持ちを思うと、私はやりきれない思いにかられます。しかし、これは、いい理事長先生といい母親のエピソードです。

その子は3年間、この二人に守られていたのです。

---

## 気づいた市長さん

成人式が来ると思い出す、ある市長さんが語ってくれたこと。

私の講演を聴いたあと市長室で向かい合い、市長さんが言いました。

「先日、市の成人式で挨拶したんです。会場はザワザワしていて、お世辞にも行儀がいいとはいえない若者たちで、真剣に聴いているようにも思えなかった。でも、出番が来て、幼稚園の園児たちがお祝いに舞台の上で踊りながら、歌をうたったのです。幼児たちが舞台に上がって並ぶと会場がシーンとなった。成人した若者たちが静まり返って、その歌と踊る姿を一心に見つめるのです。松居さんが講演で言っていたのはあのことですね」

こういう理解の仕方は嬉しい。

私はうなずきました。若者たちが、うらやましように園児を見つめる姿が目には浮かびます。それが宇宙の法則、遺伝子の働き、人間が真の幸せを探す姿です。園児たちの踊りと歌で、人間の心がまとまる。

若者たちはちゃんと、何を見つめるべきか知っている。幼児を眺めることは、自分自身の「働き」を感じることに。

厚労省が出した保育所保育指針解説書というのがあって、その一番最後にこう書いてありました。

「保育所は人が『育ち』『育てる』という人類普遍の価値を共有し、継承し、広げることを通じて社会に貢献していく重要な場なのです。」

そうであってほしいと思いますし、そうでなければ人類が危ない、と思います。人類普遍の価値を人間に教えてくれるのが幼児たちだということに、再び、気づかなければいけません。

## 最近のこと

講演先で、保育士になった人の数を辞めた人の数が上回る市があります。現場で、次の世代を育てていたベテラン保育士たちがいなくなる。保育界の保育士不足は新制度が始まって1年で、一気に危機的な状況になっています。

三人目無料と言え「タダだから」と預ける親が現れる。政府が、11時間保育を「標準」と名付ければ、「そうなんだ」と思う親が現れる。加配相当の発達障害をもった子どもの親が、私も標準で、11時間をお願いしますと言ったら、保育所はそれだけで責任ある対応ができなくなる。

保育士を三人募集して二人しか応募がなければ、現場に居るべきでない保育士を資格者というだけで雇わざるを得なくなる。複数の保育士が一部屋に居る三歳未満児の保育室は、保育に対する意識の温度差が致命的で、耐えられなくなって、心ある保育士が辞めてゆくことになったりする。



親たちのニーズではなく、保育士の数に合わせた予算組みが始まっている市もあります。

そんな中、「休みの日は、なるべく一緒にいてあげてください」と幼児の気持ちを慮って親にすすめると、人権侵害だと、親が役場に駆け込む。プライバシーの問題だ、上から目線だ、とサービス慣れた親が気色ばむ。一体自分たちは何をやっているんだろう、と保育士たちは思う。

子どもを優先しない親たちの身勝手な言葉で、保育士の人生観が壊れてゆくのです。もともと保育士を目指す人たちのほとんどが、まず子どもたちのことを考える、という人間社会を支える貴重は「人生観」を持っている人たちだった。この人たちがいまこの仕組みから消えていったら、保育は単に託児になり、その先に続く義務教育が成り立たなくなる。

国も学者も、なぜこれほど保育士が不足する事態になったのか、認識してほしい。国が子どもの気持ちを優先しないから、親もそうなる。保育士は子どもにとって最後の砦かも知れないのです。

心ある保育士の、「心ある」、これが保育そのものだった。

どんなに仕組みを変えても、保育の質は保育士の幸せであり、その幸せの「物差し」を現場で伝える園長や主任、ベテラン保育士の決意であって、その決意は、親のニーズではなく親子関係を眺めることから生まれていた。

保育は教育以上に子育てだった。子育てをする「思い」の共有だった。だからこそ園長や主任、ベテラン保育士の「優先順位を間違っている親は黙ってここを通さない」という決意が保育の根幹だったし、保育所保育指針にもそう書いてある。出来ていたかどうかは置いておいて、日本の保育に対する「思い入れ」「視点」は素晴らしいものだったはず。

各地で講演をしながら役場のひとたちに、国や親のいいなりになって保育の質を下げないでください。保育士が心のゆとりを失っていったら、取り返しつかないことになりますよ、と説明します。保育や学校教育を存続させたいのなら、心ある保育者を大切にすることです、とお願いするのです。

### 子育てをする上で、保育の限界

ある、保育室での風景です。

保育士1人で複数の三歳未満児を担当。活発で手のかかる可愛い子が1人、大人しくて手のかからないいい子が1人いました。しばらく見ていると、保育士にとって手のかからない「いい子」が、一緒にいてもらいたい人を一日中探しているのがわかります。眠たい時に一緒に眠ってくれる人を探していました。しばらく観察していなければ見えてこなかったその子の一日が見えてきました。

それが毎日続くのだとしたら、人類にとって、あってはならない風景だと、ふと思いました。

保育士も人間です。相性のいい子がいたり、特別に注意を払ってしまう子がいて当然です。慢性的に手が足りない状況の中で、保育士にとって「いい子」がふと見落とされてしまう。保育に平等は不可能です。人間社会に平等が不可能であるように。

本来無理な仕組みの中で、頭で考え過ぎ「平等」という形だけの言葉に縛られることで保育士が感性や人間性を失ってしまったら本末転倒です。保育が「子育て」である限り、複数の幼児を担当すれば、毎日、日常的に限界はあるということ。それを見極めることが保育に一番大切なことかもしれない。

親子という一生の関係であれば充分修復可能、許される不公平な一日が、保育では許されない。そういう矛盾を抱えた仕組みだからこそ、なるべく親子の関係に目を光らせ、その重要性を認識し、常に大切にしておかないと、保育士の当たり外れは子どもの人生をあまりにも左

右してしまう。

ただ預かっていけばいいんだ、といわんばかりの政府の子ども・子育て支援新制度が、この国の将来に及ぼす影響は計り知れなく大きい。

### 「風景」の中にいること

先日、2歳の子どもに何か一生懸命説明している母親を見ました。「2歳の子どもに説明する」、こんな素晴らしい瞬間があるんだ、と思いました。

真剣で、なにかとても広い、宇宙のようなものを説明している感じがしたのです。こういう時間を自分はもう一度持てるのだろうかと考え、思わず、遠くを眺めました。

幼児といると、自分が「風景」の中にいることが感じられて、自分の「立場」がよくわかります。その絶対的「立場」に安心して、暮らせばいいのだと思います。

### 園長先生からのメール

梅雨の晴れ間の日差しがまばゆく、今日は子ども達が久しぶりのプール遊びに歓声を上げて楽しんでます。松居先生、お変わりございませんか？

うれしいニュースが2つあります。

まず一つ 先日、保護者の一日保育者体験のマニュアルを検索した後、高知県の教育委員会に連絡をさせてもらい、いろいろお伺いできました。もしかしたら見学をさせて頂く事になるかもしれません。

もう一つは私たちの保育園でも一日保育者体験を実施しようと考えているのですが、いきなりは難しいので、まず参観日をクラス単位で行い、朝、9時半から保育に参加してもらい、給食と一緒に食べ、お昼寝をさせてもらってから、別のお部屋で子ども達が寝ている間にクラス懇談会后、フリートークで保護者同士で話してもらい3時におやつを食べて降園。という日程で参観日を行いました。スタートは1歳児クラスからでしたが、参加率は100%で感想の中に「長い時間なのでどうかと思っていました、あっという間に時間がたちました。」「楽しかったです。」「日頃の保育園での様子が見えてよかったです。」「午後の時間に保護者の方と仲良くなれました。」とありました。来年度の一日保育者体験に一步近づけたようで嬉しくなりメールしました。

梅雨明けにはもうしばらくかかりそうですが、夏風邪等お召しになりませんようご自愛ください。

### 保育に、お日様は大切です

こんな、新聞記事がありました。

「1歳児まで育休を 地下で保育所可能に 区長会、緊急要望」：

『東京23区の区長でつくる特別区長会は19日、待機児童対策について厚生労働省など関連省庁に緊急要望書を提出したと発表した。1歳児までの育児休業を原則義務化するような制度改正と、地下でも保育所を開設できるような規制緩和を求めた。』

「1歳児までの育児休業を原則義務化」。いい動きだと思いますが、1歳までではなく、真剣にやるなら「3歳まで」でしょう。この頃の幼児は、毎年違った役割を持っている。0歳児と3歳児では、親を育てる育て方がずいぶん違う。

1歳までと言っている限り、保育士不足と財源不足に困った末の緊急「対策」にしか思えない。区長さんたち、目を覚ましてください。子どもたちの気持ちを優先したら、育休は3歳まで。それまでは、親子一緒に、（園や空き家に作られた？）子育て支援センターに通ってくるのがいいかもしれない。そこで過ごす日々、そこで生まれる絆、往復の道のりが親子の一生を支えるのだと思います。親子の時間をより少なくする「保育の無償化」などとんでもない。

労働施策に思考の根っこがあるから、「地下で保育所可能に」などという要望につながる。

子どもたちにも、保育士さんたちにも「お日様」は必要です。

たとえ雨が降ってお日様が雲に隠れている日でも、窓を通して、雨降る園庭を眺められることが、保育士にとってどんなに大切だったか。園児と一緒に、「雨上がったら外で遊ぼうね」と、黙って心を合わせるのが保育で、保育士たちの心を育て、人生を満たしたのです。

## 「受け皿」

「保育の受け皿」という言葉を耳にするのです。  
こういう新聞記事がありました。

『安倍晋三首相は6日、東京都内で講演し、保育所などに入れられない待機児童の解消に向け、「50万人分の保育の受け皿を整備したい」と述べた。政府はこれまで、2017年度末までに40万人分の受け皿確保を目標としていたが、上積みをめざす。』

『首相は、政権が掲げる「1億総活躍社会」の目標「希望出生率1・8」について、「20年代半ばまでには実現せねばならない」と強調。その具体策として、保育の受け皿確保のほか、新婚夫婦や子育て世帯が公的賃貸住宅に優先的に入居できるようにしたり、家賃負担を軽くしたりする考えを示した。』

本来なら「子育ての受け皿」というべきかもしれませんが、でも、そう言ってしまうと、そこに危うい闇が見えてしまうから、みんな言わない。

その人の人生のあり方を決定づける「親子の関係」は、双方向へ重なる日々の体験の中で育ち、築かれてゆくものです。子育てを、親子という特別な関係が形造られる営みと考えた時に、「受け皿」という言葉自体がすでにおかしい。非人間的、非現実的なのです。それに、もう誰も気付かなくなってしまった。マスコミや教育を通しての情報の共有が、不自然を、すっかり当たり前に見せている……。首相は、国民を人間として見る前に「労働力」として見ているから、幼児の姿が見えてこない。（老人は「票」を持っているのでまだ視界に入っているのかもしれない。）

本当は、子育てに受け皿などありえない。一歳の時の一年は、その親子にとって一生に一度の、二度と体験できない特別な、特殊な一年で、それはゆっくり流れるように見えて、あっという間に過ぎてしまう。人間社会の絆の土台となるその数年の体験を犠牲に、国が経済のために、「希望出生率」を目標に、一日11時間親子を切り離すのであれば、できるかぎりその時間を価値あるものにしなければいけない。「受け皿」を用意する人たちには、その質に関して相当の責任がある。

（「新婚夫婦の家賃負担を軽くし」結婚しやすい環境をつくるという政府。子どもを産んでほしいから。

こんな記事もありました。

配偶者控除見直し検討・自民税調会長が表明：「伝統的な家族観や社会構造の変化にあわせ、女性の社会進出を阻む壁をなくしつつ、結婚を税制面で後押しする狙い」

社会進出を阻む壁は「子ども」とハッキリ言わずに、結婚して子ども（壁）を産めと言う。これがたくらみでないのなら、支離滅裂です。その根っこにある矛盾をごまかすために、「受け皿」という言葉が使われている。こういう言葉に慣れてはいけない。麻痺してはいけない。簡単に受け入れてはいけない。

ある保育園の園長先生が首を傾げていました。「受け皿で育った子どもが、受け皿で自分の子どもを育てることに躊躇しなくなったら、もちろんその逆の場合もありますが、全体的にそれが当たり前になっていったら、保育界は本当に受けきれれるのでしょうか。誰が、子どもの成長に責任を持つのか、社会としてそれでいいのか心配です」と。）

### 幼児を囲む静寂・風景

音楽もする私が、自分の子どもを幼児期に毎日十時間、預けざるを得なくなったら、どうしても欲しいものは何だろう、と考えてみました。

強く思ったのが「静寂」です。昔から幼児期の子どもを囲んでいた静寂が、近ごろ仕組みの規制緩和によって忘れられている気がしてならないのです。

背後に静寂がなければ、言葉さえも騒音になっていく。風景さえ、見えなくなってゆく。

「新しい園舎と広い園庭が完成したら噛みつきがなくなった」と言っていた園長先生の言葉を思い出します。ゆとりのある空間と景色に、保育士たちが落ち着き、無愛想だった親たちが自然に朝、挨拶するようになったというのです。不思議です。風景から挨拶が生まれます。

風景が生み出す「心のゆとり」が集団としての人間を支えていたのです。言葉でも理屈でもない。幼児の居る風景が整ってゆくと、幼児の居る風景が人間社会を整えてゆく。その風景が人間たちの安心を支えるのだと思います。「花束を贈ろう」と思う人になるのだと思います。

窓から雨をながめ、一緒にしゃがんで花をながめ、カタツムリをながめ、倒されてしまった積み木をながめ、ある日静けさの中で、無言で心を重ねてくれる人が身近にいるかどうか、で幼児期の体験はその価値が決まってくるのです。いい保育士は、それを生まれながらに理解しています。その静かな心の重なり合いが少ないと、幸福感が誰かとの相対的なものであって、自分の想像力の中にあることがわからなくなってくる。すると必然的に、数年後に始まる学校生活での人間関係の質が粗くなってくる。

いじめの質が粗くなってくる。その風景が重なり、学校を卒業し競争社会に入って行った時の体験が、年々、殺伐としたものになってきている。それが、最近わかります。信頼関係の希薄さにアップアップして、職場での人間関係が辛くなり、みんなでもがいている感じがするのです。競争社会は、誰かと競争するだけではなく、一緒に闘う（働く）人間との信頼関係に安心する、ということでもありました。心の重なり合いが薄ければ、闘ったとしても、勝ったとしても、それは虚しい体験でしかない。体験を、お金で計ろうとしても、虚しさは必ず残ってしまうのです。

損得勘定とは離れた、「忠誠心」みたいなもの、約束ごと、決まり事に人生は支えられている。

私が一人で公園に座っていたら変なおじさん。でも、2歳児と座っていたら「いいおじさん」。

そんな宇宙の法則、遺伝子の働きみたいな約束ごとを感じると、そこに居る幼児たちに、すでに存在する法則のようなものが見えて、もっと楽に生きられると思うのです。こういう流れの中に居ることに感謝すると、流れ全体にいい感じの責任を感じる。こういう種類の責任というものは、良いものだな、と理解する。

ツイッター (@kazu\_matsui) は不思議な次元で会話が成立します

『土曜日に、親たちはスキーを車に積んで出かける。「お兄ちゃん、お父さん、お母さんはお休みなんだけど、僕は保育園があるの」と園児が言う。そんな話を岩手で保育士から聞きました。土曜日も就労証明なしでも預かれという施策が広がっています。』とツイッターに私が書きました。

『子どもは夏休みがないんだってさ。私たち保育士は交代で休みを取れるけれど、一日も夏休みがない保育園だから（休んじゃダメだから）子どもは休みなし。「夏休める日」の希望保育日などの手紙もダメで「お子さんと一緒に休める日はありますか？」と聞くのもダメ。親が休みでも全部来る子どもが殆ど。』

という呟きが返ってくる。

自分の子どもの気持ちを考えない親は、自分の子どもを育てている保育士たちの気持ちも考えない。仕組みだから、仕事だから、私たちの権利だから、税金払ってるんだから、で「保育士と子どもの日常」について考えるのをやめてしまった親が数年の間に急に増えている。だから、0歳児を預けることに躊躇しない親が増えている。これに加えて、保育士たちが子どもの気持ちを考えなくなったら、考えたことを親たちに言わなくなったら、この国をこれまで支えてきた「保育」が終わってしまう。

10数年前、地方でお盆に「希望保育」で保育士が数日休みをとれた時代がありました。「保育士だって墓参りはするんだ」という園長の一言で、親たちが納得した。そんな日本がありました。一緒に育てている、という信頼関係が保育園という場所で育っていたからです。そうした人間同士の育ちあいや、気遣いが、「保育は成長産業」「11時間保育が標準」とした閣議決定や施策でこの国から消えてゆく。そのスピードが、いま速すぎます。

別の保育士さんから、

『お姉ちゃんたちだけ USJ 連れてって、一番下は保育園って子いたよ。ほんとに、馬鹿だよ。子どもをなんだと思ってるの？土曜保育安易に使うなや』という怒りの叫び。

土曜保育、長時間保育、病児保育、預かり保育、ひととき保育、障害児デイ、子どものショートステイ、学童保育、「安易に使うなや！」というのが保育士たちの本音だと思う。福祉に関わる人たちすべての本音かもしれない。「安易に」という言葉の陰に、子どもたちと保育士の「無理を承知の」時間があることに、もう誰も気を留めなくなっている。

そして、

『台風の日に大雨の中赤ちゃんを連れてくる育休中のお母さんもいる、と公立園の園長が切ない顔をしてました。育休とっても、保育園をやめたら育休明けに行き場がなくなるとか。何のための育休？』とツイートがくる。

育児をするための育休ではなく、育児から逃れるための育休。待機児童がいる地域では起こりにくいですが、もともとニーズではなく、自分の希望、便利だから、またはなんとなく、で保育園に預ける親が相当数いたのです。

政府は、潜在的待機児童の向こうに潜在的労働力を見ているようですが、それは保育の実情を知らない素人たちの希望的観測でしかない。親たちの意識の変化により保育界が追い詰められ、保育の質の低下により学校が追い詰められ、しかも税収が増えなかった時、しまったと思うのでしょう。その時、すでに福祉は成り立たなくなっている。そして政治家たちの任期も終わって

いる。三人目は保育料無料という施策もそうですが、現場が「おかしいな」と思われる施策は、だいたい親たちの子育てに関する意識を、保育が成り立たなくなる方向へ持ってゆく。

土曜日は保育園に子どもを預け、親が休む日。リフレッシュして日曜日に子どもとしっかり遊びますという親さえいました。政府が作った仕組みを利用し、何がベストか計画を立て、利用できるものは利用する。合理的といえばそうなのですが、これでは幼児と一緒にいる時間が「重荷」「負担」という認識に近づいていく。この方向へ進んで、はたして学校教育が成り立つのか、疑問です。

一方で、こんな切羽詰まった眩きが届きます。

『乳児クラスでは、其々が休憩時間など取っていたら何も出来ません。個別のお便りを書く、0歳児が多い中（勿論、午睡リズムもそれぞれです）就寝中は呼吸確認、寝返り出来る子をうつ伏せから仰向けにさせる等（そして動かすから泣いてしまう）何人保育士がいても休憩なし』

『SIDSも不安で、皆、乳児クラスを離れて休憩などできません。何か事故があると「保育士何してた？」と批判されている。でも、皆いっぱいいっぱい。「休憩とってました！保育士一人で見てました」って言ったら？暗に保育士は（特に乳児）休憩なんかないぞ！とされている』

市場原理に巻き込まれた保育界が限界に来ています。

## メールをいただきました

松居和様

いつも「シャクティ日記」（私のブログ）を拝読し、参考にさせていただいております、大阪市在住のK.I.と申します。

今年に入ってから、なんとなく手に取った「愛着障害」についての本をいくつか読み、ネット上でも「愛着障害」について色々検索していく内に「シャクティ日記」と出会いました。

私は子どもを0歳児から保育園に預けて働いていましたが、愛着障害についての本や「シャクティ日記」に出会ったことをきっかけに、先月末で退職して現在2歳4ヶ月の子どもと、家で過ごしています。保育園では概ね楽しく過ごせていたようで、大好きな先生方やお友達を作ることができました。私と二人だけで過ごしては経験できなかったことも沢山ありました。

保育園に通わせているお母さん方の中に、「子どもと家でずっといるのは私には無理」だとおっしゃる方が沢山いて、経済的な理由で預けていらっしゃる方の方が少ないのではないかと思います（厳密に言うとうちもそうです）。

また、専門職で、子どもを産む前からその分野で社会貢献することに強いこだわりのあった先輩もいて、現在二人目を出産したばかりですが、子育てだけに「縛られる」ことは良くないと考えていらっしゃるようです。

私自身、仕事を辞めるにあたって相当悩みましたが、結局何が正解なのか見えてこず、人によって外で働くことでバランスが取れているのであれば、それはそれで間違った選択肢ではないように感じています。

でも、あくまでもこれは身近な現実のみを見て感じていることなので、このままでは将来、松居先生が危惧されているような事態が起こってくるのでしょうか？

末筆ながらますますのご活躍をお祈り申し上げます。 K.I.

（返信）

お手紙ありがとうございます。とてもよくわかります。

保育園で0歳から育ったから、必ず子どもがこうなる、ああなるということではないので

す。たぶんもっと不自然な環境で、例えば貧困とか、戦争とか、不慮の事故とか、思いもよらない環境で立派に育つ子どもはいくらでもいました。でも、それは社会にそうした状況を補いあう人間関係があれば、ということだった気がします。

いま先進国社会で起こっている状況、特に親心の希薄化が原因になって起こる保育の質の低下はブログに繰り返し書いている通りで、そういう保育士の当たり外れが激しくなっている状況を知れば、三歳未満児は預けない親たちは相当数いると思うのです。社会全体の変化のことを言えば、カナダで行われた調査などを見ると、やはり保育施設の普及による愛着関係の不足は、社会全体が荒れてゆく大きな原因になっているのだと思います。（「全員保育プログラムと、子どもの認知以外のスキルの発達」 [http://itsumikakefuda.com/child\\_Quebec.html](http://itsumikakefuda.com/child_Quebec.html)）

私の視点は、どちらかと言うと、子育てを、子どもがどう育つかということより、親たちの体験と捉えて、子育てとキャリアの両立ということはありません、その体験をするか、しないか、であって、出来ることなら乳幼児とのこの体験だけはなるべく多くの人たちがした方がいいのではないかと。そういう空気が感じられる社会であってほしい、ということなのです。

確かに、子どもと長時間二人きりで一緒にいるのは、不自然ですし、それが無理と思っても普通だと思います。3、4人の大人たちが見守る、それが人類の歴史だった。子育て支援センターを中心に、親子を引き離さない施策をやってあげればよいのだと思います。そういう方法で、幼児たちの願いを優先して未満児保育を行って行けば、保育はまだ成り立つ可能性を持っていると思います。

このままでは、家庭も保育も学校も、共倒れのようになってゆく。それだけはなんとか防がないと、という気持ちでやっています。

就学前の子どもを取り巻く状況は、非常に流動的になっています。（私のフェイスブックから。一部重複しますが、リンクなどもあるので。）

「保育士の待遇改善を」 首相官邸前でデモ（TBS） <https://headlines.yahoo.co.jp/video/news/jnn?a=20170316-00000092-jnn-soci...>

『保育士全員の賃金を月額6000円増やすほか、経験年数に応じた上乘せが行われますが、「格差の解消には程遠い」と批判の声が』

賃金「格差の解消には程遠い」確かにそうなのです。しかし、もう一歩進んで「子育てに対する意識の格差」の広がり、実は問題の本質なのだ気づいてほしい。

保護者の間に広がる「子育てに対する意識の」格差、保育士と保護者の間に広がる「保育に対する意識の」格差。何より決定的なのは、国と保育者の間に広がる「保育に対する意識の」格差です。片や「雇用労働施策」として保育を仕組みとして捉え、片や「子育て」と見ていないと、幼児の視線に答えられない現実があります。国は閣議決定で「保育は成長産業」と位置づけました。一方、保育士が尊重すべき保育所保育指針、過去に保育士たちが守ってきた精神の中心には、保育は「子どもの最善の利益を優先して」と書いてあったのです。長年続けてきた保育の定義が崩されようとしている。

こうした中心がぶれてきたことによって起こる格差の広がりを、「義務教育」という仕組みは受け切れるのでしょうか。

いまこの国の土台を崩そうとしている「子育て」における意識の変化、仕組みの混乱は、その中心に「幼児たちの思い」が見えていないところに原因があります。発言しない人たちの気持ちを優先的に考えて、心をつなげる、そこが欠けているのです。

保育士のストライキを保護者が応援する、という記事がありました。そうでなくてはいけません。一番いい形です。幼児は、育てる側の心をつなげる、それが人間が社会を形成する基

本、大自然の法則です。この混乱の中で、一緒に子育てをしている、という意識が親と保育士の間に戻り、それが広がるのが最終的な目標になってほしい。園児たちはそう願っている。

ストライキをやってもらえるのはまだいいのです。その陰に、静かに辞めていく「心ある」保育士がいることの方が怖い。

その人たちの幼児を思う良心が、「保育士を辞めるという形になって」、いままで心ある保育をしてきた園長たちを直撃している。いい保育士を揃えられないという現実が、いい園長たちを精神的に追い込んでいく。倒れそうになっている園長先生たちがあちこちにいるのです。

ネットでビジネスコンサルの「いま保育で儲けよう」という宣伝を見ていると、保育を知らない人の参入が、「保育は成長産業」という閣議決定で進められている実態が見える。だからそういう保育には、保育の本質を知っている保育者は近づかない。「児童発達支援と放課後等デイサービス」<http://www.luci.jp/diary2/?p=269>という文章をブログに書いたことがあります。「保育=子育て」における境界線が、「待機児童をなくせ」という掛け声のもと、度重なる規制緩和によって見えなくなり、すべてが市場原理に取り込まれつつある。

全国で、3歳未満児の入所希望が急速に増え、特に役場の采配で職員配置が決まっていく公立保育園で、いままで3、4、5歳児につけていた加配の保育士を0、1、2歳に（安易に）（必要に迫られて）回している。その無理が小一プロブレムに直結し、その第一波が4月に学校に上がる。（第二波は4年後に来ます。）

税金を使って3歳未満児保育の「受け皿」を作り、子育ては「社会」がやってくれるものという意識を広げ、その数倍の税金を使って今度は小学校の教師加配をせざるを得なくなってきた。（臨時採用の教師の時給は、非正規の保育士の3倍です。）

「社会で子育て」などという、保育園や幼稚園、学校に子育てを押し付ける、出来もしない机上の論理を振り回しているうちに、あっという間に、人材だけではなく、財源が底をつき始めている。福祉や教育という仕組みに子育てを依存しすぎた結果が、すでに修復不可能な状況に保育界、教育界を追い込んでいる。

「子育て」は技術や学問、仕組みでできることではない。育てる側がどう育っていくか、育てる側がどう心をつなげるか、という大自然の仕組みだということをもう一度理解しないとけません。

（以前、こんな天才保育士のことをブログに書きました。<http://www.luci.jp/diary2/?p=257>）

## 塩・味噌・醤油

ある園長先生が話してくれました。

養成校の教授に信頼されているその園長は、保育士を育てるのに定評があります。ある年、保育士に欠員が出たため四人の卒業生を推薦してほしいと教授にお願いしました。

四人を選んでくれた教授が園長に笑いながら言いました。「二人は、将来現場でリーダーとなってゆく優秀な学生たちです。もう二人は、学業には向かないけれど天才的な保育士です……」

園長は一応形式的に筆記試験をしました。栄養の三要素は何ですかという問いに、天才保育士の1人が「塩、味噌、醤油」と書いたのだそうです。



園長はそこで大笑いをし涙ぐみながら私に言うのです。「この塩、味噌、醤油が、本当に、本当に保育の天才でした」

(最近のブログから)

### 子どもたちからの警告

子どもたちがなりたい職業ランキング(ソニー損保生命)

保育園の先生は上位から消えました。

2015年は第3位。2017年は第11位。

厳しく辛い、子どもたちからの警告です。安易に「預けて、働け」と言う政治家たち、その動きを扇動するマスコミに対する警告です。

保育士たちが生き活きとしていないのかもしれない。保育が「子育て」であること、幼児にとっては対一であることを忘れ、「仕事」になってきているのかもしれない。0、1歳児を躊躇せず預ける親が増えたからかもしれない。保育の現場から、幼児たちが本能的に感じていた魅力が、数年間の間に突然、欠け始めている。

このリサーチは、将来、本当に保育資格をとってほしい、心ある子どもたち、資質のある生徒たちが保育者養成校に来なくなることを意味している。

もうすでに、そういう状況に入っているのかもしれない。

以前、保育士が子どもたちの「夢」だった頃、なりたい職業のトップ3だった頃、子どもたちは、賃金とか労働条件とか、そんなことでこの仕事に魅かれていたのではなかったはず。もっともっと大切に人間的な雰囲気、そして自分がいい人になれる時間に子どもたちは憧れていたのだと思うのです。そのことに政治家たちは気づき、肝に銘じてほしい。このメッセージは、このままでは、この国の根幹が壊れてゆくことに対する、子どもたちからの警告だということ。

子育てを、一生に数度しかできない素晴らしい体験と位置付けないから、その貴重な意味を、理屈ではなく「常識」として伝承しないから、巡り巡ってこういうことになる。男たちが結婚しなくなっているのと似ています。みんな、自分の持っているいい人間性に感動する体験をしようとしな。それどころか、自分自身を体験することから、逃げ始めているのです。

四年前、新制度が始まる前年に、宇都宮の認可外保育施設で宿泊保育中に乳幼児が亡くなる事件(事故)がありました。当時、ブログにも書きました。<http://www.luci.jp/diary2/?p=255>

市が年に一度立ち入り調査をしているはずのこの施設では、パンフレットやホームページで24時間預かりや夜間保育をうたい、「看護師がおり、嘱託医とも提携しているので病気の場合も迅速な対応が可能」と宣伝していた。だが市に提出された報告書には、一時預かりのみで夜間保育などは行っていないと記載され、看護師も常駐していなかった。嘱託医として名前が挙げられていた医療機関は、両親の問い合わせに対して「そんな事実はない」と否定したという。市は、愛美利ちゃんが死亡する以前に報告書の内容と宣伝内容が違っているのを把握し施設側に指摘。施設側は「対応する」と返答していたが、「事故」は起きた。

市の担当者は「報告書に書かれた内容が本当に正しいかを逐一確認するのは難しいのが現状」と明かすが、両親は「違反車両を認識していたが、そのまま取り締まらずに走らせておいて死亡事故を起こしたようなものだ」と話している。

乳幼児という絶対的弱者を守るには、あまりにもずさんでお粗末な「現状」なのです。こういう事件が、保育制度を規制緩和し労働力を確保しようという政府の保育施策の警告になっていない。新制度による規制緩和で認可される小規模保育所は急増し、行政はますます手一杯になっていて、乳幼児たちを守れなくなってきている。「待機児童をなくせ」という掛け声のもと、むしろ似たような事故が増える方向に進んでいるのです。

この国が、欧米のように訴訟社会になることでしか止まらないのか、と思うと情けなくなります。

### 「愛し続けていること」

出会うことの不思議は、人それぞれが自立出来ないといことを証明しているようです。去年、私の講演を埼玉の幼稚園で聴いた一人の母親が、手紙と詩を送ってくれました。「話が進むに従って、私の中で不思議に思っていた問題が少しずつ解かれていきました」と書いてありました。

メールもいただきました。「講演を聞いた時、私は自分の詩の隅々をすっきりと理解できた喜びで涙ぐんでしまいました。隣のママ友達には『笑すぎて泣いてたでしょ!?!』と笑われましたが・・・。

よそから越してきたので地元ではなく、核家族で、夫は都内に通勤しています。私の子育ては、幼稚園の先生方、ママ友達、ご近所の方、まさに地域に支えられています。 小野省子」

私は、それから講演で小野さんの書いた詩を二つ朗読しています。

余韻、余白、で表現する、これは、言葉の喋れない0才児が私たちから「人間性」を引き出そうとする人間の進化の仕組みに似ています。感性の世界で人間たちが全体的につながることを要求します。

### 「愛し続けていること」 詩／小野省子

いつかあなたも  
母親に言えないことを  
考えたり、したりするでしょう

その時は思い出してください  
あなたの母親も  
子どもには言えないことを  
ずいぶんしました

作ったばかりの離乳食をひっくり返されて  
何もわからないあなたの細い腕を  
思わず叩いたこともありました  
あなたは驚いた目で私をみつめ  
小さな手を  
不安そうにもぞもぞさせていました

夜中、泣きやまないあなたを  
布団の上にほったらかして  
ため息をつきながら  
ながめていたこともありました

あなたはぬくもりを求め  
いつまでも涙を流していました

私は母親として 自分はずかしいと思いました  
だけど、苦しみにつづされることはなかった  
それは、小さなあなたが  
私を愛し続けてくれたからです

だからもしいつか  
あなたが母親に言えないことを  
考えたり、したりして  
つらい思いをすることがあったら  
思い出してください

あなたに愛され続けて救われた私が  
いつまでもあなたを  
愛し続けていることを

絶対に一人では生きていけない「あの人たち」が、まず私たちを育てます。

一律一人では生きられない幼児たちに、一律私たちが人間らしく育ててもらい、育ててもらった私たちがあの人たちを守る、育てる。そうやって人間たちは進化して来たのです。この順番は絶対に忘れてはいけない。

社会全体で子育て、と政治家は言うけれど、あれは実は保育とか学校、つまり福祉や教育でやる「仕組み」で子育て、ということです。それでは、社会全体から本来の人間性が失われてしまう。システムが人間を支配するようになって社会全体が殺伐としてくる。

幼児は私たちを信頼することで、私たちに人間であることの幸せを教え、ときどき許し、絆を育てます。それが土台にあって、社会が成り立つ。私たちは、この詩人が言うように、幼児によって「救われる」。そうやって人間性は潰されずに回り続けてきた。絶対的弱者が運動の始まりに存在して、生きる動機、生きる意思を生み出す。

障害児、障害者、認知症のお年寄り、弱者はどんな時代にも、社会の一部として存在しました。最近名前がついただけで、以前は名前をつけて分けなくてもいいくらい普通に居ました。人間社会はいつも様々な命の組み合わせで成り立ってきた。古典落語の与太郎、昔話の三年寝たろう、眠りむしじゃらあ、わらしべ長者。一見、一人では生きられそうにないひとたちがどういう役割を果たしてきたか、気付かなければいけない時期にきています。パズルのように組み合わせさせて私たちは生きてきたのです。パズルを組むために、凸凹が必要なのです。様々な次元で、お互いに双方向に育てあう、必要とするのが人間社会なのです。

そのパズルの組み方を学ぶために、0歳から3歳までの幼児とゆっくり時間をかけて付き合ってきたのです。この人たちを理解すること、理解しようとする、が一つ一つの命の存在意義と存在理由を人間たちに教えてきたのだと思います。

(省子さんの子育ての詩と解説が、<http://kazumatsui.com/genkou.html>からダウンロードできます。)

0、1歳児と過ごす時間は、人生は思うようにならないことを実感する時間。そして、自分がそれを笑顔で受け入れられることに気づく時。

「受け入れること」に人生の大切な道があって、自分のその気持ちに応えてくれる人がいることに感謝すると、理屈ではない、調和（子育て）が始まる。